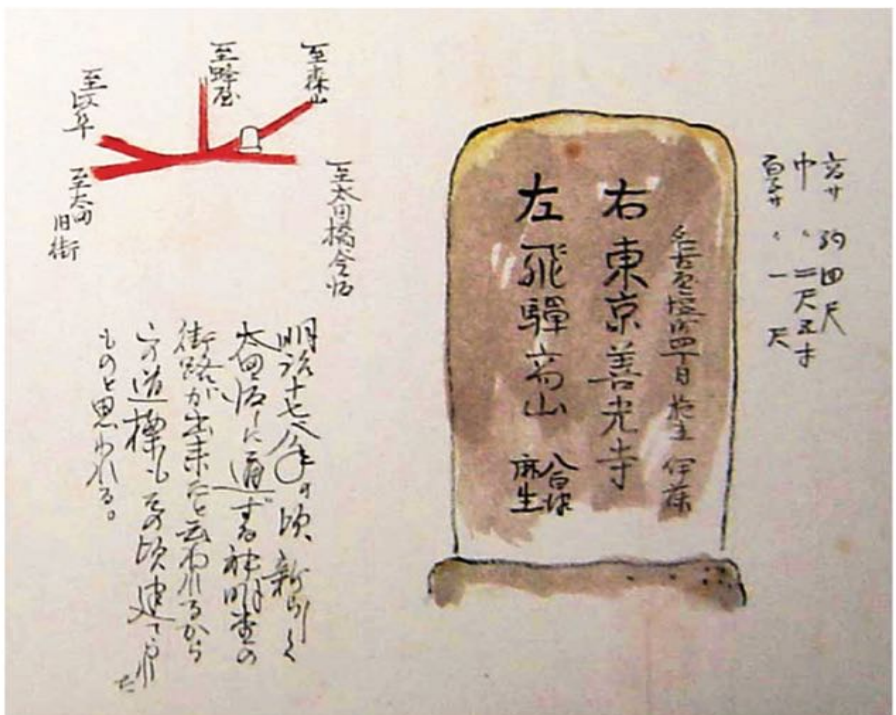




高橋余一の「生活絵巻」

09 道標 どうひょう



〔道標部分〕 高サ約四尺 巾二尺五寸 厚サ一尺
 名古屋塩町四丁目施主 伊藤
 右 東京善光寺 左 飛騨高山 八百津 麻生
 〔地図部分時計回りに〕
 至太田橋今渡 至太田旧街 至岐阜 至蜂屋 至森山
 明治一七、八年の頃 新らしく太田渡しに通ずる神明堂の街
 路が出来たと云われるから この道標もその頃建てられたも
 のと思われる。

■ 神明堂の道標



余一は「生活絵巻」のほかに、古井や太田にある道標や石仏も写生しています。道標とは石や木でできた、行く先を示すもので、江戸時代から多く作られるようになりました。

絵の道標の右には、余一自身が採寸した大きさを記しています。そして左には、道標の場所を示した小さな地図を描き、その下に製作された時の状況を書いています。

余一は、巻の冒頭で「道しるべに想う」と題し「真夏の太陽にやかれ酷暑の風雲にさらされて幾星霜移りゆく一コマ一コマの歴史と共に歩みつけ自らの使命を果たした功績をも素知らぬ顔で今も道標此所に建つ」と、長い年月を経て今なお残る道標に、当時の人々の往来をしのび、慈しみを込めています。